

風姿花伝第一、年来稽古条々

十二三より

此年の比よりは、早漸う声
も調子にかゝり、心附く比
なれば、次第々々に物数を
も教ふべし。先童形なれば、
何と為たるも幽玄なり。声
も立つ頃なり。此の便りあ
れば、悪き事は隠れ、善き

〔口訳〕 此の年の頃からは、漸く声も調子に合ふやうになり、能についてもわきまへが出来るやうになるから、次第々々に能の番数をも教へるが良い。此の年頃では、先づ第一に、可愛い児姿であるから、何をやらせても幽玄である。又声も美しく引き立つ時代である。この優姿美声といふ好都合な所があるから、悪い所は隠れ、善い事は一層立派に引立つて見える。概して、子供の猿楽に於ては、あまり手の込んだ細かい物真似などは、させてはいけない。さういふものは、見た所も不似合

事は 愈花めけり。大方、
児の猿楽に、さのみに細か
なる物真似なむどは、為さ
すべからず。当座も似あは
ず、能も上がらぬ相なり。
但し、堪能に成ぬれば、何
としたるも善かるべし。児

であり、能も上達しない相である。し
かし、本当に堪能になつたのならば、
何をやつても好いであらう。美しい児
姿で、声も美しく、しかも芸が上手で
あるならば、どうして成功しないとい
ふ事があらう。

といひ、声といひ、しかも
上手ならば、何かは悪かる
べき。

さりながら、この花は真の
花にはあらず、ただ時分の
花也。されば、此時分の稽
古、総てく易きなり。さ

しかし、此の芸の立派さ面白さは、
真の花とはいへない。これはただ時分
の花（年齢のために自然に生れた立派
さ）に過ぎない。で、此の十一二歳頃
の稽古といふものは、一体に容易なも
のである。従つて、此の時代に如何に
芸が立派でも、それを以て、其者一

る程に、一期の能の定めは
成るまじき也。この比の稽
古、易き所を花に当て、
伎をば大事にすべし。働き
をも確やかに、音曲をも文
字にさわくと当たり、舞
をも手を定めて、大事に稽

生涯の伎倆を卜定する事は出来ないものである。此の時代の稽古に於ては、その者の演じ易い所を美しい見せ場とし、伎をば十分に大事にしなければならぬ。働きなども確実にしつかりと稽古し、音曲なども文句にはつきりと当り、舞をも型を厳守して、疎略に流れぬやう念入りに稽古すべきである。

古すべし。

〔評〕 此の章の内容は四段に分ち得る。先づ童形で美声であるから、花めく時代であるといふ事。第二に、あまり細かい物真似をさせるべきでないといふこと。但し出来るならば、無理に抑制せずして、自然の発露にまかせて良い。第三に、如何に此の時代に巧妙であり立派でも、それは未だ一時の花であり、従つて、将来を卜定するには足りぬものであること。第四に、此の時代の稽古の要領は、容易な芸で花を咲かせ、一面に、

謡・舞・働きに於ては、確実に楷書的に、念入りに稽古すべき事を説いて居るのである。

世阿弥の時代に於ては、稚児愛翫の風習の相当に盛んな時代であつた。美しい稚児姿の舞や、可愛い声の謡には、感涙を流して嬉しがつた時代である。当時の僧侶の日録などを見ると、かやうな記事に屢々遭遇する。さうした時代を考へてこの文をよむべきである。又、児でありながら、物真似なども巧みであると、往々非常な天才児あつかひをせられるものである。これは古も今も同様であるが、世阿弥等は、これ

一時的なものと見抜いて、時分の花に過ぎぬと喝破してゐる。これは、遊楽習道見風書の第一段に、更に詳細に説かれてゐる。心すべき所である。

稽古に於ては、基礎を正確に念入りにやるべき事を教へ、見物の賞翫はその児の得手で容易な方面でつないで置いて、一面に、正確な基礎的訓練をつむべき事を注意してゐる。実に周到な心づかひである。